

筆者は先に、ペストが描かれたマンゾーニ作『いいなずけ』の紹介をした。今回は、これも感染症であるコレラを描いた『ヴェニスに死す』を取り上げる。トーマス・マンの原作(1912年)、ルキノ・ヴィスコンティ監督の映画(1971年)、ベンジャミン・ブリトゥン作曲のオペラ(1973年)を見比べる。しかし、8月20日予定の新社木会講演の首題である『戦争と音楽』に関連するお話を致したく、またブリトゥンに馴染みの薄い読者のためにも、まずはブリトゥンについて語り、そのあとに『ヴェニスに死す』の原作・映画・オペラを論じたいと思う。テーマが二つに分かれることをお赦し願いたい。

I. ベンジャミン・ブリトゥン(Benjamin Britten)と戦争について:

日本ではブリテンと書かれることが多いが、正しい発音はブリトゥン。日本で最も知られた作品は、『青少年のための管弦楽入門』だろう。今から80年前の皇紀2600年に、日本政府は米・英・独・仏・伊・ハンガリーに奉典曲の作曲を委嘱した。英国を代表して作曲したのが、当時27歳のブリトゥン。米国は日米関係緊張を理由に日本の申し出を拒否した。歴史家の中には、「日本にとり、アジアに植民地を多く持つ英国との戦争は不可避だったが、米国との戦争は避けられたかもしれない」という人もいるが、1940年に英国は日本の作曲依頼に応じ、米国は応じなかったのは興味深い。



ブリトゥンの『Sinfonia da Requiem 鎮魂交響曲』は日本政府が「祝典にふさわしくない」との理由で採用しなかった。但し委嘱料は払われ、若いブリトゥンは大いに助かったそうだ。1956年ブリトゥン自身の指揮、NHK交響楽団により日本初演がなされた。この来日時に観た能『隅田川』を材料として、彼は後にオペラ『カーリュウリヴァー』を作曲している。日本では2600年奉典曲ではリヒャルト・シュトラウスのものがたまに演奏されるが、ドイツではまず演奏されない。ブリトゥンの曲は英国でもよく演奏される。YouTubeで、新しい映像が希望ならトーマス・アデス指揮BBC交響楽団のものを、若き日のサイモン・ラトルの感情込めた指揮ぶりを観たければバーミンガム市交響楽団のものをお薦めする。信時潔の『海ゆかば』は鎮魂歌として名曲だが印象は悲しいと筆写は感じる。鎮魂交響曲第三楽章「永遠の安息を」は二長調で暗くはなく、穏やかな安らぎを覚え、お祭り騒ぎはでないが、祝典曲としてふさわしいと思う。第一楽章は悲劇的、第二楽章は破壊的で、これが「ふさわしくない」とされた理由だろう。でも、これがあるから第三楽章も生きてくる。米国滞在中のブリトゥンはこの作曲をする前に連鎖球菌の感染で重体となった。作曲家・指揮者のマーラーの命を奪った病気だが、マーラーの娘で看護師の訓練を受けたベアタがブリトゥンの面倒を見た。

ブリトゥンが鎮魂曲を書いたのは、「委嘱文の英語が分かりにくく、過去の天皇たちの鎮魂が趣旨と理解した」との話も残っているが、筆者は、作曲者は1939年当時の欧州大戦を第一、第二楽章で表し、それを止めてほしい気持ち、日本も平和も求めてほしいという気持ちを第三楽章に托したのではないかと思う。第一、第二楽章が日中戦争を念頭においているとの説もあるが、それは深読みのし過ぎだろう。1942年にはブリトゥンは良心的兵役拒否を申し立て、受理されている。

ブリトゥンには、『War Requiem』という作品(1961年)がある。1940年ドイツの爆撃で破壊されたコヴェントリーの聖マイケル教会の修復献堂式(1962年)のために書かれたもの。献堂式は神の栄光を讃えるのが通例らしいが、殺し合いを憎み、平和を求めるブリトゥンらしく『死者のためのミサ曲』を作曲したのだ。ミサ曲通例のラテン語歌詞に加えて、第一次大戦で戦死したウィルフレッド・オーウェンによる英語の詩が挿入されているのがユニーク。第二次大戦で交戦したソ連、英国、ドイツの歌手、すなわち、ガリーナ・ヴィシネスカヤ、友人のピーター・ピアーズ、ディートリッヒ・フィッシャー＝ディースカウの起用を念頭に作曲された。初演ではヴィシネスカヤが参加できなかったが、初録音では、この三人が歌った。

さて、オペラ『ヴェニスに死す』は、病気をおして作曲され、1973年に完成、ブリトゥン最後のオペラとなった。筆者がブリトゥンの訃報に接したのは、赴任準備で出張していたロンドン、1976年12月のことだった。

II.『ヴェニスに死す』

粗筋は、以下の通り。50 歳代の作家グスタフ・フォン・アッセンバッハは、失われた靈感を得ようとヴェネチアに単身旅をする。妻には先立たれ、娘は遠くに住んでいることになっている。ホテル滞在客一家の中に美少年タジオを見かけ、夢中になる。コレラ流行の警告にも拘わらず、アッセンバッハは少年を追い求めて滞在を続け、少年に一言も声をかけることなく、コレラに罹って死ぬ。

II-1. トーマス・マン(1875～1955 年) 中編小説『ヴェニスに死す』(1912 年)

ここでは、作曲家・指揮者マーラー(1860～1911 年)との関係、さらに同性愛・少年愛に焦点を当てて見る。

【作曲家・指揮者マーラーとの関係】

トーマス・マンと妻、子供、兄のハインリヒ・マンは 1911 年、アドリア海のブリオニ島に滞在中、新聞でマーラーの死を知った後、静養先をヴェネチア本島近くの海岸保養地リド島に移した。マーラーの死というショック、またポーランド人貴族一家の美少年に魅せられた自身の経験をもとに、この小説を書くに至る。主人公の名前をマーラーと同じグスタフとしたのもそのためだと言われる。容貌もマーラーを模している。マンはマーラーより 15 歳若いですが、既に『ブッデンブローク家の人々』(1901)、『トニト・クレーガー』(1903 年)で名を成していたので、マーラーと対等な付き合いができたと思われる。その上、1908 年に結婚したカーチャ(あるいはカティア)・プリングスハイムの双子の兄クラウス・プリングスハイムはウィーンで 1906～1907 年にマーラーに指揮を学んでいたことも、関係を深めた背景にあらう。プリングスハイム家は、ミュンヘンの裕福なユダヤ人実業家の家庭である。なお、クラウスは日本で戦前・戦中・戦後と作曲・指揮とその指導をしており、永住先の東京で亡くなった。弟子の一人、指揮者山田一男は生前、「自分はマーラーの生まれ変わりだ」と言っていたと、音楽評論家片山杜秀氏は伝えている。

1908 年、ミュンヘンでのマーラーの第七交響曲ドイツ初演直後のホテル Vier Jahreszeiten (四季)でのパーティーでトーマス・マンとマーラーは会っている。1910 年、マーラーの第八交響曲世界初演もミュンヘンで行われ、作曲家リヒャルト・シュトラウス、シェーンベルク、レーガー、ラフマニノフ、指揮者メンゲルベルク、ワルター、クレンペラー、ストコフスキー、文学者トーマス・マン、シュテファン・ツワイク、ホフマンシュタール、シュニッツラー等、錚々たる文化人が集まった。この時も Vier Jahreszeiten でのパーティーがあり、トーマス・マンは自著「大公殿下」(1909 年)をマーラーに手紙を付けて渡している。これに対するマーラーからの返事は無い、と思われてきたが、2018 年に礼状が発見された。マーラー夫妻が米国に渡ってからの 1910 年 11 月 6 日の消印。1910 年はマーラーの妻アルマが建築家グロピウスと浮気をした年でもある。Vier Jahreszeiten は今でも営業しており、筆者も何回か中をのぞいたことがある。



マーラー



レコードを聴くトーマス・マン



ホテル 四季 ミュンヘン



クラウス・プリングスハイム

マーラーの死因は連鎖球菌の感染で、アッセンバッハの死因はコレラの感染である。マンは『ヴェニスに死す』の中で新たに創造したものではなく、タジオも、コレラも、民謡芸人も皆そこ(マン滞在時のヴェニス)にあった。」と書いている。ただ、筆者が 1911 年に欧州でコレラの大流行があったのか調べてみたが、確認できなかった。

《《《《《《《 《》》》》》》》》》》》

【男性の同性愛・少年愛】

アッセンバッハにはマーラーとマンとの両方が投影されているといわれるが、ポーランドの美少年に惹かれる部分は、もちろんマン自身の経験にもとづく。同行していた妻カーチャがそのように証言している。マンはカーチャとの結婚で多くの子供をもったが、同性愛者でもあった。自伝的小説『トニオ・クレーガー』では、少年トニオが美少年ハンス・ハンセンを好きになるが、マン14歳の時の級友パウル・エーレンベルクへの恋がモデルとなっている。マンは自身の12歳の長男クラウスにさえ欲情を感じたと告白している。『ブッデنبロック家の人々』では、ハンノがカイに同性愛を感じているが、遠回しに表現されている。

ドイツでは、シラーは若いゲーテを、ゲーテはヘルダーを愛し、フリードリヒ大王もビスマルクも異性だけを愛したのではなかったようだ。ニーチェに愛されたワーグナーは、「ニーチェの問題は少年への色欲だ」と言っている。マンの一家と親戚にはゲイ、近親相姦、自殺のケースが多い。息子のクラウスとゴロは、夫々ゲイ。娘エリカの夫、W.H.オーデン(英国出身で米国に移住した詩人。エリカに一旦英国国籍を取らせ、米国移住をしやすくするために名目上の結婚をした)もゲイ。息子クラウスと娘エリカとは兄妹相姦関係にあったと信じられている。1905年にマンがカーチャとの結婚直前に書いた、『ウェルズンゲンの血』は兄妹近親相姦を扱っているが、カーチャとその双子の兄クラウスがモデルだと信じられている。マンの姉妹は二人とも自殺、息子のクラウスとミーヘヤエルが自殺、トーマス・マンの兄ハインリヒの二度目の妻が自殺。

『ヴェニスに死す』に話を戻す。アッセンバッハは明らかにタジオの肉体に恋しているが、プラトンの『饗宴』中の「肉体の美への愛より魂の美への愛が重要」を思い出して、タジオへの愛は、性欲でなく神聖な愛だと自分に言い聞かせようとする。『ヴェニスに死す』にはユーモアがない、との批評がある。タジオは理想化されすぎて、鼻くそをほじるとか、クシャミをすることは絶対でない。この本は発売と同時に、特にフランスを中心によく売れた。マンによれば、「どうして、ある本が他の本より売れるのかを説明するのは難しい。読者の高評価の根底にあるのは共感だろう。」ということだ。『ヴェニスに死す』の場合、読者は少年愛に共感を覚えるのだろうか？「恋狂いで取り乱してしまったアッセンバッハの最後の救いは死でしかなかった」という見方に共感を覚えるのだろうか？

《《《《《《《 《》》》》》》》》

最後に映画とオペラをレビューする。筆者も1979年に家族で海水浴場のあるリド島に安価なパック旅行で逗留し、水上バスでヴェネチア本島に赴いて観光をしたことがあり、現地ロケをした映画とオペラ映画には、どちらも懐かしさを覚える。但し、映し出されるヴェネチア市街はコレラ蔓延で不潔である。ヴェネチア観光映画としてふさわしいのは、映画『旅情』(原題:Summertime)の方だろう。

II-2. ルキノ・ヴィスコンティ(1906～1976年) 監督 映画『ヴェニスに死す』(1971年)

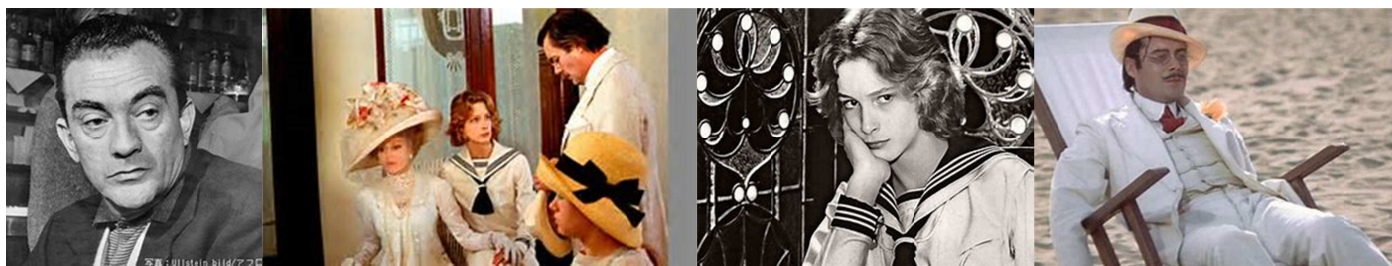
筆者が勤めていた日本の会社のイタリア子会社がミラノにあり、そこにヴィスコンティという上品で、親切で、感じが良く、美しい女性が働いていた。ミラノの名門貴族ヴィスコンティ家の流れとのこと。ルキノ・ヴィスコンティも同じ貴族ヴィスコンティ家の傍流の出であり、若い頃は美男子でココ・シャネルに見いだされたという。女性にもてたのは勿論、彼自身「両性愛者(バイセクシャル)」であることを公然と認めていた。少年愛を扱った映画を作るバックグラウンドがある、というべきか。同性愛の相手は、ゼッフェレッリ、マストロヤンニ、アラン・ドロン、ヘルムート・バーガー。特にバーガー(これは英語読み。オーストリア人だからベルガーかベアガーとドイツ語読みが正しい)とは私生活のパートナーの関係で、ヴィスコンティの死後、バーガーは「ヴィスコンティの未亡人」と自称したこともある。

この映画では、主人公アッセンバッハは作家でなく音楽家にしてある。よりマーラーに近づけたわけだ。ヴィスコンティは映画監督になる前からオペラ・舞台演劇製作にも関わっており、音楽的素養があるのだろう。事実、彼はバーガーに、バーンスタイン、カラス、ヌレーエフなどを紹介したり、自宅にビートルズを招いたりしている。映画『ヴェニスに死す』は、マ

マーラーの交響曲第五番第四楽章アダージェット(マーラーが妻アルマにあてた音楽のラブレター)を感情表現に用いて、マーラー好きを世間に増やした。浜辺の一シーンでもマーラーの交響曲第三番第四楽章のアルト・ソロが使われている。アッセンバッハがタジオを見つめて頬を赤らめるシーンで、レストランで流される曲は、レハールのオペレッタ『メリー・ウイドウ』の『唇は語らずとも』。タジオがホテルのピアノで弾く曲は、ベートーヴェンの『エリーゼのために』。

どのような美が芸術をもたらすかの比較は、アーノルド・シェーンベルクを模したアルフレッドとアッセンバッハの激しい議論の回想シーンとしてなされている。マーラーがアポロ的、シェーンベルクがディオニュソスの美の擁護者だったわけではなく、ここではアッセンバッハが、アポロ的審美からディオニュソスの恋の陶醉に向かう伏線を示すものだろう。

この映画が日本で劇場公開された頃、タジオを演じたスウェーデン人ビヨルン・アンドレセンが、一大ブームを引き起こしたことを、筆者は憶えている。本稿を書くに当たり、この映画のDVDを見直してみた。観光のために、ヴェニスの人々がコレラ蔓延をひたかくしする場面が、以前にもまして印象に残った。国の威信のために対応を遅らせた中国、習近平来日とオリンピック(観光立国)のために対応を遅らせた日本に同じ過ちを見出すからだ。現在はコロナによる死者の多いスペインが優遇策を講じて英・独からの観光客誘致の必死だということだ。



ルキノ・ヴィスコンティ シルヴァーナ・マンガーノ(タジオの母) ビヨルン・アンドレセン(タジオ) ダーク・ボガード(アッセンバッハ)
 ビヨルン・アンドレセン(タジオ)
 ダーク・ボガード(アッセンバッハ)

II-3. ベンジャミン・ブリトゥン(1913～1976 年)作曲、マヴァンヴィ・パイパー台本 オペラ『ヴェニスに死す』(1973 年)

実は筆者は、このオペラの舞台上演を見たことがないが、映画化(1981 年)されたものはYouTubeで観ている。本稿は、映画化されたオペラに基づいている。作曲は 1971 年 12 月から 1973 年 3 月までかかったから、その間にヴィスコンティの映画が公開されたことになる。ブリトゥンは、「ヴィスコンティの映画は、アッセンバッハとタジオの関係が余りにもみだらだから、作曲中に観ないように」と周囲から忠告されたそう。オペラでは、タジオとその家族・友人たちは歌わず、話さないバレエ・ダンサーによって演じられる。

ユニークなのは、主な歌手が二人ということ。アッセンバッハの歌はほとんど独白で心象を表しやすい。また旅行者、お調子者のツアガイド、ゴンドラの漕ぎ手、ホテル・マネジャー、ホテルの床屋、民謡芸人のリーダー、ディオニュソスの声を一人のバス・バリトンがかけもつ。これが時に喜劇的な狂言回しを担っていて面白い。アポロの声は、カウンター・テナー。ホテルのその他の人々と街の人々は合唱。オペラ映画を観はじめたときは、初老のアッセンバッハがテノール(高音)であることに違和感をもったが、そのうちに気にならなくなった。なぜテノールかと言うと、作曲者の友人で 1957 年以来、ブリトゥンの死まで同性愛的パートナーでもあったテノール歌手ピーター・ピアーズ(1910～1986 年)のために、このオペラは書かれたからだ。オペラ映画は、初演とほぼ同じ配役だが、アッセンバッハは、ピアーズが病気だったので、オーストラリア人ロバート・ガードが演じている。

アポロとディオニュソスの戦いの悪夢にアッシェンバッハがうなされる場面は、このオペラ映画では実におどろおどろしい。舞台でのオペラでは、どのように演じられるのだろうか？美・理性・形式を愛するアポロ的で純粋な気持ちでタジオに近づいたアッシェンバッハは、少年への恋に落ち、ディオニュソス的な恍惚を感じるようになる。このジレンマは、しばしば未熟な少年たちに惹かれてきたブリュン自身に身近な問題であったようだ。アッシェンバッハの死の後に響く音楽は静謐で、美と愛が死によって救いに至るワーグナーの『トリスタンとイゾルデー』終幕の『愛の死』の精神に近い。



ピアーズとブリュン 1940年 NY オペラ舞台より:タジオと友人達の 砂浜での「アポロのゲーム」 オペラ映画より:コレラで 人影の失せたヴェニス市街
《以上》